

職員のための講師養成講座

一日常業務の遂行に活かすことも見据えて一

阿部 光伸(愛媛大学 教育・学生支援機構学生支援センター 講師)

藤本 正己(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 特定研究員)

講師略歴

【阿部光伸】専門は、高等教育政策論および産業教育論。専門学校での教員生活、私立大学の職員を経て2013年10月から現職。現在は、学生支援センター/教育企画室(兼担)にて学生のコンピテンシーの涵養開発、ボランティア活動支援と、他機関を含め大学職員の能力開発を担っている。

【藤本正己】専門は統計科学、高等教育論。2008年に徳島文理大学に大学職員として入職後、情報センターで学内システムの運用・管理の業務、教務部教務課において入試業務を担当。2022年1月より現職。現在、大学職員を対象としたSD研修の講師を中心に、学内の教学IRに関する業務も行っている。

プログラム概要

“研修講師!? 自分には関係ないな!”とっていませんか?

研修講師には、「インストラクショナル・スキル」だけではなく、「プレゼンテーション・スキル」と「人前力」が必要といわれます。皆さんは、日々、会議での資料説明、企画の稟議、学生の指導等々、他者と関わる仕事に関わられていると思います。言い換えれば、日常業務の遂行に、これらの能力は必要不可欠とすることができます。

そこで本プログラムは、SD研修の講師としての「知識・技能・態度」の習得を目指すと共に、それらを活用して所掌業務を円滑に遂行するための基礎力の涵養を目指します。

具体的には、会議での「説明力」、企画立案のための「課題発見力」、主体的行動を促せる「発問力」などをワークをつうじて学んでいただきます。

また、自大学での研修講師を担う予定のある方には、マイクロティーチングを実施することも可能です。

準備物・事前課題

所属大学のSDに関する資料をご準備ください。

主な受講対象者

- ・研修講師になることに関心のある職員
- ・研修で講師を務める可能性がある職員
- ・自身の日常業務遂行力不足を感じている職員

到達目標

1. 講師に求められる役割と姿勢を説明することができる。
2. 講師として学習者の学びを促進する方法を説明することができる。
3. 話し手責任のプレゼンテーションができる。
4. 研修講師が持つ能力を、日常業務に活用することができる。

日時

8月24日(水)9時30分~14時30分

FD担当者のためのFD企画講座

吉田博(徳島大学 高等教育研究センター 教育改革推進部門 准教授)

仲道雅輝(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 副室長 准教授)

塩川奈々美(徳島大学 高等教育研究センター 教育の質保証支援室 助教)

上月翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 特任助教)

講師略歴

【吉田博】愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。主な著書に、『学習評価(シリーズ大学の教授法4)』(分担執筆)、『アクティブラーニングの活用(看護教育実践シリーズ4)』(分担執筆)などがある。

日本高等教育開発協会理事、大学教育学会、初年次教育学会等所属。専門は高等教育開発。

【仲道雅輝】1995年日本福祉大学社会福祉学部卒、2009年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了 修士(教授システム学)。2017年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士後期課程修了 博士(学術)。1995年より日本福祉大学職員、2011年から愛媛大学にてFD・SDや学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。(2008年度eLC認定e-Learning Professional、2014年度SDC認定)

主な著書には、ナカニシヤ出版の「大学におけるeラーニング活用実践集—大学における学習支援への挑戦2」(共著)、「大学初年次における日本語教育の実践—大学における学習支援への挑戦3」(編著)、さくら社出版の「教育評価との付き合い方—これからの教師のために」(共著)など。

【塩川奈々美】徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻地域創生分野博士後期課程修了。博士(学術)。専門は日本語学および方言学。2018年に徳島大学総合教育研究センター(現:高等教育研究センター)教育改革推進部門特任助教を経て、2020年4月より現職。同センター教育改革推進部門(兼任)。FD担当として徳島大学における全学FDプログラムの企画・運営・調査研究に携わり、支援業務に取り組むほか、学生アンケートや教員アンケートなどの教学アンケートにおける自由記述についてテキストマイニングを活用した質的分析に取り組む。

【上月翔太】専門は高等教育論、文芸学。日本学術振興会特別研究員(DC2)、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻助教などを経て2020年より現職。FDをはじめとした諸活動の企画や実施に加え、大学における人文学、芸術教育、カリキュラム編成について調査研究も行っている。著作に『大学教育と学生支援』(分担執筆)、『学習支援Q&A』(分担執筆)、『カリキュラムの編成』(分担執筆)など。

プログラム概要

近年、FDは教学マネジメントを支える基盤として位置づけられ、授業改善にとどまらず、カリキュラム改善や組織改善も含め、高等教育機関の教育開発に寄与することが求められています。また、オンラインによるFD研修や、研修やセミナーの形式とは異なるFD活動も拡大しています。

本プログラムでは、前半は講師よりFDの概要を解説し、FDの事例やFDを企画する際の手順や運営上の留意点を紹介します。後半は、参加者が自身の所属する高等教育機関または学部等のFDニーズを整理し、FDの企画案を作成します。続いて、ブレイクアウトルームを活用して、参加者同士で共有及び意見交換を行いながら企画案をブラッシュアップします。

個人ワークやグループでの意見交換に対して積極的に参加し、FD担当者同士のコミュニティづくりにつながることを期待しています。

準備物・事前課題

FDの企画を行う自組織のFDニーズや課題を挙げておく。

主な受講対象者

FDについて学び、自組織のFDの企画案を作成したいFD担当者

到達目標

1. FDが求められる背景・政策・取組について説明できる。
2. FDを企画する際の順序や留意点を説明することができる。
3. FDの企画立案ができる。

日時

8月24日(水)9時30分～14時30分

オンライン授業でのアクティブラーニング

金西 計英(徳島大学 高等教育研究センター 学修支援部門 教授)

講師略歴

徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年、博士(工学)を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授。教育工学を専門とし、高等教育のe-Learningについての研究に取り組む。また、高等教育におけるアクティブラーニングの実践の研究にも取り組む。

プログラム概要

コロナの感染拡大により、2020年は多くの大学でオンライン授業が実施されました。多くの教員にとって、オンライン授業の実施は、準備の整わないままの見切り発車の部分もあったと思います。2022年度も全面的に対面授業へ戻すという状態にはなっていません。そこで、2022年の夏、自らのオンライン授業を振り返る、あるいは、バージョンアップしてみようと思いませんか。

そこで、オンラインでのアクティブラーニングについて、みなさんと一緒に考えたいと思います。担当の金西が2020年、2021年におこなったオンラインの授業実践のノウハウを中心に、みなさんと共有し、実践のノウハウを深めたいと思います。オンライン授業の概要のまとめと、オンラインでのグループワークの体験を通じて、オンライン授業でのアクティブラーニングについて学んでいきます。みなさんが2022年秋季以降の授業からオンラインでのアクティブラーニングが実施できるように背中を押す役割が果たせればと思います。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

オンラインでアクティブラーニングを実施してみたいけれど、どうやればよいか分からず困っている教員の方を歓迎します。学務系の職員の方も、オンラインのアクティブラーニングの理解を深めたい、アクティブラーニングを実際に体験してみたいという方は歓迎します。

到達目標

1. オンライン授業の構成方法等について説明できる。
2. オンラインでのアクティブラーニングの実施方法について説明できる。
3. オンラインでのアクティブラーニングの授業設計ができるようになる。

日時

8月24日(水)9時30分~11時30分

ケースを通して考える中間管理職入門

小方直幸(香川大学 人文社会学系 教育学部・創発科学研究科 教授)

野口里美(香川大学 企画総務部企画課 次長(企画課長兼任))

石原卓也(大分大学 医学・病院事務部 医事課長)

講師略歴

【小方直幸】広島大学高等教育研究開発センター教授、東京大学大学院教育学研究科教授を経て現職。専門は高等教育論。大学の理念や機能、高等教育政策や大学経営について教育・研究し、現在、放送大学の大学マネジメント論も担当。

【野口里美】1986年香川大学採用。総務、会計、学務を一通り経験した後、2018年度から現在の部署に所属。2007年度から2012年度までFD関係業務を担当し、SPOD設立当初からネットワークコア校のFD担当事務として携わる。これまでのSPODフォーラムでは、「ワールド・カフェ」「ツールを使ってコミュニケーション～自己理解と他者理解～」等の講師を担当。

2015年度SPOD-SDC認定。2016年度教職員能力開発拠点SDC認定。その他、Coco-iku(心育)SPTコミュニケーションカウンセラー・メンタルヘルスイストラクター認定。

【石原卓也】2002年香川医科大学採用。会計課、医学部経営企画課、医事課、財務部経営企画グループを経験し、2021年4月より現職。2010・2011年度に次世代リーダー養成研修を受講・修了。2016年度SPOD-SDC、2018年度教職員能力開発拠点SDC認定。この他2016年から、全国国立大学病院事務部長会議と大学改革支援・学位授与機構が主催する国立大学附属病院経営分析ワークショップの実施にも関わり、病院経営を担う人材育成に取り組んでいる。

プログラム概要

昨今の大学改革の中で、定型業務だけでなく様々なプロジェクトへの対応が求められる職場が多いと思います。プロジェクト業務は、トップダウンによる指示も多く、職場のリソースが限られていることもあるため、中間管理職は、どのような対応が組織にとって最適かの意思決定を求められます。この時、事案の重要性、職場の状況次第では、悩ましい課題に直面することもあります。

そこで、本プログラムでは、具体的な事例を通じて中間管理職の立場や役割を考えるとともに、職場の中でどのような観点から悩ましい課題に向き合うか、グループディスカッションを通じて考える契機といたします。

準備物・事前課題

当日までに事前配付資料に必ず目を通し、3つの設問に対するご自身の考えや回答をまとめ、当日持参してください。予習時間2時間程度。

主な受講対象者

- ・課長又は課長補佐(副課長)相当級の職員(昇格して5年以内程度が望ましい)
- ・管理職等への登用を考えている中堅職員
- ・部署間をまたぐ組織運営について考えてみたい職員

到達目標

1. 管理職の立場や役割を理解することができる。
2. 管理職としての振る舞い方を理解することができる。
3. 組織を超えたプロジェクトを遂行する上で、ヒントを共有することができる。

日時

8月24日(水)9時30分～11時30分



学生支援に関わる学生対応 カウンセリング(入門編)

杉田 郁代(高知大学 大学教育創造センター 准教授)

講師略歴

専門は、高等教育、学生支援。2009年に環太平洋大学次世代教育学部講師、同准教授、比治山大学現代文化学部准教授などを経て、2018年より現職。学生総合支援センター兼務。公認心理師・学校心理士・臨床心理士。

プログラム概要

学生支援に関わる部署では、学生に接する場面が多くあります。学生に接する場面では、学生に寄り添い、学生のニーズを把握し、一緒に解決の糸口を見出すこともあるのではないのでしょうか?そのようなときには、カウンセリングスキルが役に立ちます。本プログラムで取り扱うカウンセリングスキルは、学生の大学適応に向けた支援の際に用いる基本的な技法を取り扱います。また、このカウンセリングスキルは、多くの場面に応用できます。

本プログラムは、具体的な事例を交えたワーク型で進めていきます。複数の事例を提示し、グループで対応を考えるとともに、ロールプレイを用いて、実際に体験してもらいます。体験することによって、カウンセリングスキルについて理解を深めていきます。また、ワークショップ形式ですので、参加者の皆さんとともに、一緒に学んでいきましょう。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

学生支援関連部署に関わる教職員。カウンセリングの基本的な技法を取り扱いますので、入門者も参加しやすいプログラムにデザインしています。

到達目標

1. 学生支援において、必要なカウンセリングの基本技法について説明できる。
2. 学生支援に必要なカウンセリングの姿勢について、説明できる。
3. 「学生中心の大学」の実現のためにより学生支援ができるようになる。

日時

8月24日(水)9時30分~11時30分

ケースで考える若手職員のための 学生支援・学生対応

藤巻 晃(徳島文理大学 地域連携センター兼総務部総務課 係長)

講師略歴

1999年より徳島文理大学に勤務。総務課、入試広報部、地域連携センターを経て、2022年度より総務課と兼務。SPODでは、講師養成研修、2014年～2015年にSPOD次世代リーダー養成ゼミナールを受講。2016年にSPOD-SDC、2019年にSDCを取得。

これまでにSPODフォーラムにおいて、2015年「若手職員へ贈るチームワーク入門～『目の前の仕事をこなす』からのステップアップ～」、2016年「学生対応の心得・入門編 ー職員として気がかりな学生とどう向き合うかー」、2018年「若手職員のためのキャリア形成入門」の講師を担当。そのほかにも学内外で講師を担当。

プログラム概要

近年、高等教育機関への進学率が上昇したことなどにより、資質や能力、興味・関心などの面で多様な学生が入学しています。また、新型コロナウイルス感染症により従来の学生生活が一変しました。今困っている学生へのよりよい支援とはどのようなもののでしょうか？

本プログラムでは、まず高等教育機関の職員としての役割や廣中レポート以降の歴史的な流れを押さえます。その後、学生対応中に起こった様々なケースをもとに学生支援の方法について考えていきます。皆さんが普段の業務で実践していることやこれまで経験した学生対応事例を披露してください。また逆に皆さんが日頃困っていることや対応に苦慮しているような課題についても一緒に考えていきたいと思います。受講生皆さんと一緒に学生支援について学び考え、学生支援(学生相談)を教育の一環としてとらえてサポートできるようになりましょう。

準備物・事前課題

学生対応で困っていること、悩むことなどを考え、書き出しておいてください。当日、匿名で情報提供してもらいます。(提出物がいつも遅れる、聞いた事しか答えてくれない、対人関係のトラブル、などなど)

主な受講対象者

窓口担当として学生とよりよい関係を築きたいと思っている採用1～5年程度で30歳未満の若手職員

到達目標

1. 高等教育機関の職員としての役割を説明できる。
2. 学生支援・学生相談についての歴史的な流れを説明できる。
3. 障害者差別解消法の概要を説明することができる。
4. 窓口対応を教育の一環としてとらえ、職員として適切な行動をとることができる。
5. 他機関の職員と情報交換ができ、学生支援の方法を一緒に考えることができる。

日時

8月24日(水) 12時30分～14時30分

実践!D&I

(ダイバーシティ&インクルージョン) 推進

黒澤あずさ(香川大学 ダイバーシティ推進室 コーディネーター・特命講師)

講師略歴

証券会社系経済研究所を経て、2001年、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻開発・ジェンダー論コース修了。東京都(東京ウイメンズプラザ)、内閣府男女共同参画局で男女共同参画推進行政にかかわった後、公益財団法人日本女性学習財団で、学習プログラムの作成・実施、男女共同参画推進をテーマとした月刊誌の編集・教材開発、NPO、大学、自治体等との協働事業のコーディネーターを行う。昨年6月に、香川大学男女共同参画推進室に入職し、2022年4月より現職。

プログラム概要

本学では、2021年10月、四国の大学として初のダイバーシティ&インクルージョン(D&I)推進宣言を行い、D&I推進の基本方針を策定しました。これまでの男女共同参画推進の取り組みからさらに一歩進んで、より広い視野で多様性の実現を目指しています。

このプログラムでは、本学の取り組みをご紹介した後、D&Iの基礎知識を学び、D&I推進の壁となっている要因について、個人・グループワークを通じて、理解を深めます。また、各大学の事例を持ち寄り、参加者間で状況・情報共有をしながら、実践できる施策を一緒に考えていきます。みなさまのご参加をお待ちしています。

準備物・事前課題

各大学で行われているD&I関連施策(男女共同参画、障害者支援、外国人支援、性の多様性、高齢者支援、その他)について事前に調べておいてください。

主な受講対象者

学内でD&I推進に関わっている・関わる予定のある教職員

到達目標

1. D&Iについて自身の持つ認識を明確にすることができる。
2. ディスカッションを通して他の受講者と共に学びあう雰囲気づくりに貢献できる。
3. D&I推進についての施策を提案することができる。

日時

8月24日(水) 12時30分~14時30分

オンライン授業でもインタラクティブな 学びを

NEW!

杉田郁代(高知大学 大学教育創造センター 准教授)

高畑貴志(高知大学 大学教育創造センター 准教授)

講師略歴

【杉田郁代】専門は、高等教育、学生支援。2009年に環太平洋大学次世代教育学部講師、同准教授、比治山大学現代文化学部准教授などを経て、2018年より現職。コロナ禍において、大人数の同期型授業、非同期型授業において、本日紹介する会議アプリツールを用いて、双方向性を持たせた授業実践に取り組んできた。

【高畑貴志】専門は情報科学。2000年に大阪大学基礎工学研究科助手、2003年に高知学園短期大学講師、2015年に湊川短期大学准教授、2018年より高知大学大学教育創造センター特任講師、2021年より現職。eラーニング(知プラe)や教学IRなどを担当。

プログラム概要

学生を主体的に学ばせていくには、学生と教員のインタラクティブなやり取りが重要になります。そのインタラクティブなやり取りは、学生の学習に対する動機づけになるとともに、知識の理解・習得に導いてくれる効果も持っています。そこで、このプログラムは、コロナ禍において、インタラクティブ性を担保するために講師が用いてきた2つのオンラインツール(ライブ投票&クイズツールSlido・ホワイトボードMiro)を紹介します。

このプログラムでは、インタラクティブが可能な2つのオンラインツールを、受講者の皆さんに実際に触ってもらう体験の場を提供します。次に、教員としてのツールの使い方と授業実践事例を紹介します。その後、グループで、オンラインツールの可能性について討議を行います。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

対面及びオンライン授業において、インタラクティブなやり取りが可能な授業を目指す教員

到達目標

1. SlidoとMiroの基本的な機能と授業での使われ方を説明できる。
2. SlidoやMiroを、配布資料を参考にして自分の授業に取り入れることができる。

日時

8月24日(水) 12時30分~14時30分

面談に役立つアカデミック・ アドバイジングの手法（基礎編）

清水 栄子（追手門学院大学 共通教育機構 准教授）

小林 忠資（岡山理科大学 獣医学部 講師）

講師略歴

【清水栄子】広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校FD高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教、講師などを経て、2018年9月より現職。日本アカデミック・アドバイジング協会（JAAA）会長。著書に『大学の学習支援Q&A』（近刊、共編著）、『アカデミック・アドバイジングーその専門性と実践ー日本の大学へのアメリカの示唆』（単著）がある。

【小林忠資】名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士後期課程満期退学。名古屋大学高等教育研究センター研究員、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特定研究員、特任助教を経て、2018年4月より現職。日本アカデミック・アドバイジング協会会員。著書に『大学の学習支援Q&A』（近刊、分担執筆）、『看護のための教育学』（共編著）がある。

プログラム概要

アカデミック・アドバイジングとは、学生の目標設定とその達成に向けて学生のニーズに沿った支援を行っていくものです。たとえば、履修に関する情報提供と相談、学習状況の確認と助言、進路の相談などです。アカデミック・アドバイジングは近年日本においても聞かれ始めた言葉ではありますが、内容的にみるとこれまで教職員が面談等によって日常的に行ってきた活動ともいえます。米国のハンドブック等で紹介されているアカデミック・アドバイジングの主な技法を学ぶことを通して、教職員個々が経験をもとに構築してきた自分なりの面談の方法を捉えなおす機会になればと考えます。

本プログラムでは、面談に役立つアカデミック・アドバイジングの技法について事例を通して学習するとともに、グループで事例を検討することで、技法への理解を深めます。

準備物・事前課題

動画教材の視聴

主な受講対象者

- ・アカデミック・アドバイジングに関心のある教職員
- ・学生面談を行っている教職員

到達目標

1. アカデミック・アドバイジングの特徴を説明することができる。
2. 面談におけるアカデミック・アドバイジングの技法を挙げることができる。
3. 面談において学生の状況に応じた対応ができる。

日時

8月24日（水）15時15分～17時15分

支え促す体験学習

高橋平徳(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 准教授)

講師略歴

専門は生涯学習論、経験学習論、組織論(人的資源管理)、教員養成。2002年早稲田大学教育学部卒業、2011年早稲田大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。2016年北海道大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。修士(教育学)、博士(経営学)。2011年千葉大学大学院看護学研究科特任助教、2014年札幌医科大学医療人育成センター特任助教を経て2015年より現職。著書に高橋平徳・内藤知佐子編著『体験学習の展開』(医学書院、2019)、「救急救命士の経験学習プロセス:医療専門職間の連携に注目して」松尾睦編著『医療プロフェッショナルの経験学習』(同文館出版、2018)がある。

プログラム概要

私たちは日々何かを体験し、それをもとに考え、自分自身を作っています。皆様も1人の人間として体験を重ね、今のあなたをつくられているでしょう。また、教職員として、学生やスタッフにも豊かな体験を与え成長してほしいと考えておられるでしょう。

体験学習とは具体的にどのようなもので、どのように実践していけばよいのでしょうか。その重要性を実感していながらも、いざ実践となると、とまどわれるのではないのでしょうか。

本プログラムは、「支え促す体験学習」として、より効果的に体験学習を行えるよう、体験学習の基本的な考え方や、支援の視点、発問や応答といった具体的な言葉がけの方法をおさえることができる機会となるよう構成しています。

本プログラムは、これから体験学習を企画される方はもちろん、現在運営されている方の実践の振り返りにも貢献できると思います。興味のある方はぜひ参加をご検討ください。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

体験学習の理論や実践に関心のある教職員

到達目標

1. 体験学習の概念を説明できる。
2. 体験学習の過程を説明できる。
3. 成長を促しやすい体験を説明できる。
4. 体験学習を支援し促す視点を説明できる。
5. 体験学習を支援し促す方法を説明できる。

日時

8月24日(水) 15時15分～17時15分

大学職員のための教職協働入門

藤本 正己(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 特定研究員)

講師略歴

専門は統計科学、高等教育論。2008年に徳島文理大学に大学職員として入職後、情報センターで学内システムの運用・管理の業務、教務部教務課において入試業務を担当。2022年1月より現職。現在、大学職員を対象としたSD研修の講師を中心に、学内の教学IRに関する業務も行っている。

プログラム概要

高等教育機関においては、教員と職員が協働して業務を遂行する教職協働の場面は多くあります。たとえば、組織として実施する入試業務は、教職協働によって行われている代表といえるでしょう。教職協働を実践する場面では、職員側の理解と教員側の理解に齟齬があるために、職員と教員とのやり取りが上手くいかない場合もあるのではないのでしょうか。

このようなことを踏まえ、このプログラムでは、教職協働の定義にはじまり、教員と職員の特徴、教職協働の実践事例の共有などをもとに、参加者の機関において教職協働を実践するためのヒントを得てもらうことを目的とします。ディスカッションやグループワークを通じて、教職協働に関する意見交換をしていきましょう。

準備物・事前課題

所属機関における教職協働の事例を1つ探しておいてください。

主な受講対象者

教職協働に興味・関心のある入職10年以内の職員

到達目標

1. 教職協働を説明できる。
2. 教員と職員の特徴を説明できる。
3. 所属機関で教職協働を実践するための方法を説明できる。
4. 教職協働に関する多様な考え方や実践事例を尊重し、共に学びあう雰囲気に貢献できる。

日時

8月24日(水) 15時15分~17時15分

これだけは押さえておきたい オンライン授業の基礎と実践

藤澤 修平(香川大学 大学教育基盤センター 特命講師)

小坂 有資(香川大学 大学教育基盤センター 特命講師)

講師略歴

【藤澤修平】2012年香川大学創造工学部実験実習係に採用後、香川大学防災教育センター、四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構(危機管理先端教育研究センター)にて技術補佐員として勤務。在職中、遠隔講義システムの維持管理、技術補助業務に従事。2020年度から現職。情報リテラシー関連科目のマネジメントの他、香川大学Moodle・Zoomに関するサポート、学内向け活用ガイド作成等を行う。

【小坂有資】2018年より現職。香川大学において、Teamsを授業で活用するためのFDを実施し、問題発見・解決型授業や授業外学修を促進するための授業を実施するためのFDではオンライン授業の実践事例を多数紹介。担当してきた授業では、特にオンライン(リアルタイム)で、アクティブラーニングの技法をとりいれた問題発見・解決型授業を実施し、それらの実践事例は香川大学大学教育基盤センターのウェブサイトに掲載されている。

プログラム概要

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の流行等が発端となって、全国の大学において、ICT技術を用いたオンライン授業(オンデマンド、リアルタイム、ハイブリッド等)が急速に普及・発展しました。2022年の今となっても、コロナの収束は見え、オンライン授業は(対面授業と同様に)出来て当たり前の授業形態となっています。

このプログラムでは、一般的な知識や手法の紹介、香川大学における実践事例の紹介等により、オンライン授業の基礎的な知識を学び、到達目標の修得を目指します。一から学びなおしたい方だけでなく、既に持っているオンライン授業の知識を点検し、不足部分を補う目的の方にも受講いただければと思います。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・遠隔授業について基礎から学びたい教員
- ・遠隔授業に関する自身の知識状態を点検したい教員

到達目標

1. 遠隔授業の種類と特徴を説明できる。
2. 遠隔授業の内容に応じて適切な教授方法やアプリケーションを選択できる。

日時

8月24日(水)15時15分~17時15分



ルーブリックを用いて学生の成果を可視化するアセスメント

塩崎俊彦(高知大学 大学教育創造センター 特任教授)
高畑貴志(高知大学 大学教育創造センター 准教授)

講師略歴

【塩崎俊彦】専門は日本文学(特に17世紀から19世紀にかけての俳諧史)、高等教育論(アクティブラーニングのプログラム開発、教育効果の検証など)。SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)講師。高知大学教授を経て現職。愛媛県松山市生。

【高畑貴志】専門は情報科学。2000年に大阪大学基礎工学研究科助手、2003年に高知学園短期大学講師、2015年に湊川短期大学准教授、2018年より高知大学大学教育創造センター特任講師、2021年より現職。eラーニング(知プラe)や教学IRなどを担当。

プログラム概要

学修成果の可視化ということについては、「大学における学修成果を各大学や分野の特性に応じて可視化することが重要」(中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」2012)という提言がなされ、後に「学生が「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力を身に付けられていることを実感・説明でき、大学が教育課程の改善に活用できるようにするためにも、複数の情報を組み合わせた多面的な把握・可視化が必要である」(中央教育審議会大学分科会「教学マネジメント指針」2020)との方向性が示されました。

この間、多面的評価の一手法としてルーブリック評価が注目されるようになりましたが、学生の汎用的能力を測定することには、さまざまな困難が伴ったことと思います。

この研修では、高知大学で実施した学生の汎用的能力をルーブリックによって自己評価するという試みとその結果の一部をご紹介します、「学生の自己評価」といういっけん曖昧で怪しげな概念によって、学生の成長を可視化していくことの意義について考えていきたいと思っています。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

学修成果の可視化やそのためのアセスメントに関心のある教職員

到達目標

1. 「学修成果の可視化」とはどのようなことか説明できる。
2. 学修成果を可視化する方法について、具体的に説明できる。
3. 学生が汎用的能力を自己評価できるようになることの意義について説明できる。

日時

8月24日(水)15時15分~17時15分

トップリーダーセミナー 「カリキュラムの編成」

中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授)

講師略歴

専門は高等教育論および人材育成論。1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手、同准教授などを経て2015年より現職。愛媛大学の教育の質向上に向けたFD、SD、IRを始めとした諸活動の企画、実施、評価に加え、教職員能力開発拠点の活動として他機関における研修や組織開発支援を行う。大学教育、大学教員、大学の管理運営、看護教育などのテーマの書籍多数。

プログラム概要

カリキュラムの編成は、入学から卒業までの期間における学生の学習全体を設計する活動です。カリキュラムをうまく編成できれば、個々の授業の効果は高まり、学生が円滑に学習を進め、卒業時の高い学習成果につなげることが可能になります。

大学におけるカリキュラムの編成は、学問の自由のもとで各大学に大幅な裁量がゆだねられています。そのため、すぐれたカリキュラムとはどのようなものなのか、カリキュラムはどのような要素から構成されているのかを理解する必要があります。また、カリキュラム編成の各場面ではどのような論点があるのか、カリキュラムの編成に教職員をどのように巻き込んでいくかといった実践的な知識も求められるでしょう。このプログラムでは、大学におけるカリキュラムの編成の基本的な知識を提供することで、参加者の所属組織の特徴にあったカリキュラムの課題解決の方法を考える機会にしたいと考えています。

準備物・事前課題

参考図書:中井俊樹編(2022)『カリキュラムの編成』(玉川大学出版部2022年7月刊行予定)

主な受講対象者

カリキュラムの編成や評価に関わる教職員

到達目標

1. 大学のカリキュラムの編成の意義を説明することができる。
2. カリキュラムの構成要素を説明することができる。
3. カリキュラムの編成の過程を説明することができる。
4. 所属組織のカリキュラムの課題に対する解決方法を提案することができる。

日時

8月25日(木)9時30分~11時30分

教務担当者が知っておきたい 法令・制度と最新政策動向

宮林 常崇(東京都公立大学法人 東京都立産業技術大学院大学管理課 課長)

講師略歴

公立大学法人首都大学東京(現 東京都公立大学法人)に入職後、首都大学東京(現 東京都立大学)で教務畑を中心に歩み、文部科学省へ出向した後、教務課係長、国際化推進本部担当係長、日野キャンパス庶務係長、URA室長、企画広報課長等を経て2020年4月から現職。主に職員対象の研修会やセミナーにおいて人材育成に関する報告・発表を行っている。公立大学協会事務局参与、名古屋大学高等教育研究センター教務系SD研究会・大学教務実践研究会事務局長、公立大学職員SDフォーラム代表。著書に『大学業務の実践方法』(共編著)、『大学教育と学生支援』(分担執筆)、『大学の組織と運営』(分担執筆)などがある。

プログラム概要

教務事務では学内規程等が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、教務事務関連法規の考え方が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。

この研修では、法規の基本を確認した後、教務事務の現場で起こるケース(授業科目の単位数設定・編入学の単位認定・休学や退学等)を題材としたワークや、窓口対応(成績問い合わせ・不正行為等)のケーススタディ、職場における実践的な知識の継承方法の理解などにより、大学教育を支援する職員に求められる基本的な知識や心構えを身につけます。また、中央教育審議会大学分科会で現在議論されている大学設置基準の改正動向についても扱います。

※プログラムの半分程度は、大学教務実践研究会が毎年開催している「教務系職員初任者講習会」と同一です。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・教務事務を担当して1~3年目程度の職員
- ・教務事務の経験はあるが、根拠を意識して業務を遂行したことがあまりない職員
- ・教務事務の経験はないが、教務事務関連法規の考え方に触れてみたい職員(会計や施設管理といった「管理部門」の方にも、高等教育機関で働く上で大切な視点を身につけることができます)

到達目標

1. 大学教育を支援する職員に求められる基本的な知識や心構えを身につけることができる。
2. 担当業務の根拠を自分で調べることができる。
3. 教務事務を取り巻く制度(単位認定や退学・除籍など)の根拠と実務の差を説明できる。
4. 大学設置基準の改正動向について職場で共有できる。
5. 実践的な知識を継承することができる。

日時

8月25日(木)9時30分~11時30分

理工系基礎科目において 学生の学習を促す学習評価

榊原 暢久(芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教授)

吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター 准教授)

講師略歴

【榊原暢久】北海道教育大学(札幌校)小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士(理学)。旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師、芝浦工業大学工学部准教授・教授を経て、2019年4月より現職。ファカルティ・ディベロッパー、SDコーディネーター。

日本高等教育開発協会、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発(特に、理工系数学基礎教育や教員支援(FD)プログラム)。

【吉田博】愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。主な著書に、『学習評価(シリーズ大学の教授法4)』(分担執筆)、『アクティブラーニングの活用(看護教育実践シリーズ4)』(分担執筆)などがある。

日本高等教育開発協会理事、大学教育学会、初年次教育学会等所属。専門は高等教育開発。

プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必修科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムは、このような理工系基礎科目において、学生の主体的な学習を促す学習評価を効果的に授業に組み込むための方法を取り扱います。つまり学生の成績を付けるために行う評価(総括的評価)の手法ではなく、「学生の学習を促す」ための学習評価(形成的評価)に焦点を当てています。評価の意義や種類と特徴を解説し、実際の評価方法やフィードバックの仕方などの実践事例を紹介し、講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。

また、参加者同士で、自身の担当する授業の実践内容や課題を共有し、相互支援の取組を通して、課題解決や授業改善のヒントが見つかることを期待しています。

準備物・事前課題

参加者が担当する講義科目のシラバス1つ(講義を担当されていない教職員の方は、自校で実施している理工系講義科目のシラバス1つ)を持参してください。また、本プログラムで使用するMiroの操作練習を事前に行っていただきます。参加者の確定後に講師よりMiroの練習を行うためのURL等を案内する予定です。

主な受講対象者

- ・自身の理工系基礎科目の中に、学生の学習を促す「学習評価」を取り入れたい教員
- ・自身の理工系基礎科目における「学習評価」に関する課題や困難について、他者との実践共有を通して解決するためのヒントを得たい教員
- ・自身の理工系基礎科目を振り返り、授業構成を「学生の学習を促す」という観点で再検討する方法を知りたい教員

到達目標

1. 学生の学習につなげる学習評価について基本事項を述べることができる。
2. 理工系基礎科目における学習評価について、自身の担当授業の成果や課題、改善点を明らかにすることができる。
3. 理工系基礎科目における学習評価について他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

日時

8月25日(木)9時30分～11時30分

プロジェクト達成のための マネジメント手法

丸山 智子 (愛媛大学 教育・学生支援機構 学生支援センター 准教授)

講師略歴

専門は、教育開発、プロジェクトマネジメント、リーダーシップ開発。Columbia University Teachers College 修士課程修了。博士(学術)。プロジェクトマネジメント専門企業の研究開発部にて、プロジェクトにおける人材資源マネジメントの研究に従事した後、2013年に愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特任助教。教職員の能力開発業務に携わる。2018年同機構学生支援センター講師を経て、2021年より現職。PMP (Project Management Professional)。

プログラム概要

現在の大学の仕事は、定常型業務に加え、不確実性の高いプロジェクト型業務としてチームで取り組まなければならない機会が益々増えています。チームは、部署内での小さなものから組織的な対応が必要となる大きなものまで存在します。また、教員は、複数の研究者でチームを組み、決められた期間・予算の中で独自性の高い研究に取り組みます。

プロジェクトは、メンバーの技量やマネジメント力、人間関係などによって良好になったり低迷したりと、さまざまな要因で変化します。プロジェクトは成り行き任せでなく、継続的にコントロールすることが求められます。そこで、本研修では、プロジェクトの成功に必要な基本的なプロジェクトマネジメントの知識体系について学びます。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・プロジェクトマネジメントに興味のある教職員
- ・プロジェクト型業務を成功させるためのノウハウを習得したいと思っている職員

到達目標

1. プロジェクトとは何かを説明できる。
2. プロジェクトマネジメントのプロセスを述べることができる。
3. プロジェクトマネジメントを職場の業務に活用できるようになる。

日時

8月25日(木) 9時30分～11時30分

Blended Learningで活用できる グループワークのアイデア

村田 晋也(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師)

講師略歴

九州大学大学院経済学府博士後期課程単位取得満期退学。九州国際大学経済学部経営学科専任助教を経て、平成26年9月より現職。専門は経営学(組織論、人的資源管理論、リーダーシップ論)。現所属部署にて、FD・SD、学生の汎用的能力開発プログラムの運営、共通教育科目の担当、初年次科目の授業支援等に従事。大学間連携共同教育推進事業UNGL事業推進責任者。

プログラム概要

これまで多くの先生方が、ご自身の担当授業に学生同士のディスカッションや多様な形式のピア/グループワークなど、学生自身が主体的・能動的に授業に参加できるアクティブ・ラーニングの手法を導入されてきたことと思います。しかしながら、パンデミックの影響で遠隔での授業実施を余儀なくされたり、新たなツールの使用を求められる等により、例年通りの方法を用いづらくなったり、活用を見合わせなければならなくなったりしたかもしれません。

このプログラムでは、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド形式での授業で実施できるアクティブ・ラーニングのアイデアを幾つか取り上げ、学生の参加意欲を刺激し、協同的な学習の意義や有効性に気付いてもらうために導入できるアクティビティについて体験的に学んでいただけるよう企画しています。これはパンデミックの収束後においても、対面/遠隔を併用したBlended Learningとして継続的・応用的に活用することができると推察します。研修の中では、先生方のご経験をシェアしていただく機会も設けたいと思います。多くの方のご参加をお待ちしております。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

授業内でグループワークやディスカッションなどを活用(ないしは導入を検討)している教員の方を歓迎致します。併せて、各種セミナーの講師経験があったり、今後講師を務める予定をお持ちの職員の方々にもご参加いただくことができます。

到達目標

1. 授業への参加意欲を高めるためにハイブリッドで実施できるアクティブ・ラーニングのアイデアの幾つかについて説明できる。
2. ウォーミングアップのアクティビティについて、その意義と有効性を説明できる。
3. 学生の参加意欲を刺激するためのアイデアの体験を通して習得し、自分の授業(ないしセミナー等)への導入を検討できる。

日時

8月25日(木)9時30分~11時30分



トップリーダーセミナー

「これからの大学教育と経営の在り方 ～生き残る大学となるために～」

秦 敬治(岡山理科大学 副学長・教育学部長)

講師略歴

1986年西南学院大学職員、2006年愛媛大学助教授～教授、2014年追手門学院大学副学長、2018年岡山理科大学副学長。専門は教育経営学(博士 教育学)。特に、高等教育経営で大学運営の在り方、教学マネジメント、教職員の能力開発、リーダーシップ論、コーチング等の研究・教育と実践を行っている。多くの大学でのFD・SDに加え、学生のリーダーシッププログラム開発・実施も行っている。また、大学や企業のコンサルティングを行うとともに、経営者・行政の管理職・市民向けのリーダー養成研修も多数、引き受けている。さらに、一般社団法人大学改新機構を設立し、全国の大学関係者ととも学生士の成長にポジティブに関与するための教職員の能力開発と大学組織運営について、研究と実践を重ねている。

プログラム概要

残念ながら、現在の日本の大学は、入学者の確保、教育、マネジメント等、様々な面で苦勞しており、さらにはグローバル化やDXにも対応できておらず、世界だけではなく、アジアの中でもランキングが低下している。このプログラムでは、現在の日本の大学の何が問題であるかを考え、これから大学を取り巻くネガティブな要因についても提示しながら、今後の進むべき道を模索する。その上で、大学自らがビジョンや計画を策定する重要性とそれらを動かすポジティブな組織文化の醸成方法について、いくつかの事例も紹介しながら参加者の皆さんと一緒に考えるきっかけを提案する。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・教員・職員を問わず、大学運営に管理職として関わっている方
- ・教員・職員を問わず、大学運営や教学マネジメントに関心のある方
- ・今後の大学の在り方について関心のある教職員の方々

到達目標

1. 日本の大学における問題点について説明することができる。
2. 近い将来に日本の大学に起こるネガティブ要因について説明できる。
3. 中期ビジョンと中期計画の重要性を説明できる。
4. ポジティブな組織文化醸成の重要性について説明できる。
5. 1～4を踏まえて、自分なりの大学の課題とその解決法を考えることができる。

日時

8月25日(木) 12時30分～14時30分



自立型人材となるための 「セルフ・エンパワーメント実践」

阿部 光伸(愛媛大学 教育・学生支援機構学生支援センター 講師)

講師略歴

専門は、高等教育政策論および産業教育論。専門学校での教員生活、私立大学の職員を経て平成25年10月から現職。現在は、学生支援センター/教育企画室(兼担)にて学生のコンピテンシーの涵養開発、ボランティア活動支援と、他機関を含め大学職員の能力開発を担っている。

プログラム概要

「やってみせ 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は動かじ」と詠んだのは、連合艦隊司令長官・山本五十六です。この句は、「経験」から学ぶ事の大切さを教えてくれています。多くの職場でも、OJT(On-the-Job Training)を中心に人材育成が展開されていると思います。しかしOJTは、指導する人材の能力に左右されやすく、システムチックに計画・実施することは難しいと言われます。加えて、日常業務に忙殺され教える余裕がないし、自信もないという人も多いのではないのでしょうか?

先の山本五十六の句には、「話し合い 耳を傾け 承認し 任せてやらねば 人は育たず」という続きがあり、人を育てるために「対話」することの大切さが語られています。

そこでこのプログラムでは、OJTに代わり「対話」による人材育成手法の有効性を共有すると共に、「エンパワーメント」する方法をワーク(セルフチェック、メンタリング)をとおして学んでいただきます。

準備物・事前課題

自己理解シートの事前記入

主な受講対象者

課長相当職の職員を主対象としますが、人材の育成・評価について関心がある方の受講も歓迎します。

到達目標

1. 人材育成とは何か説明できる。
2. 期待される人材像を説明できる。
3. 人材育成のための他者評価ができる。
4. 自立型の人材を育成するための対話ができる。

日時

8月25日(木) 12時30分~14時30分

テキストマイニング入門

塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター 助教)

講師略歴

徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻地域創生分野博士後期課程修了。博士(学術)。専門は日本語学および方言学。2018年に徳島大学総合教育研究センター(現:高等教育研究センター)教育改革推進部門特任助教を経て、2020年4月より現職。同センター教育改革推進部門(兼任)。FD担当として徳島大学における全学FDプログラムの企画・運営・調査研究に携わり、支援業務に取り組むほか、学生アンケートや教員アンケートなどの教学アンケートにおける自由記述についてテキストマイニングを活用した質的分析に取り組む。

プログラム概要

皆さんは授業評価アンケート等で回収した自由記述の回答をどのように処理していますか。自由記述の内容をトピック毎にまとめたり、一覧化するに留まっているものも多いのではないのでしょうか。こうした手作業による集計は少ない件数であれば有効な手段となりますが、膨大な件数の回答や、属性別の傾向を捉えたい時等、条件や状況によって処理できる量にも限界があります。

そこで、本プログラムではKH Coderを利用したテキストマイニングについてその方法や事例紹介を行いつつ、実際に参加者の皆さんに体験してもらうことにより、テキストマイニングの基礎を学んでいただくことを目指します。

データの整理の仕方、ソフトの使い方、図の読み方などの基本を押さえ、どのように活用することができるのか一緒に探っていきましょう。

準備物・事前課題

受講者には事前にテキストマイニングソフト「KH Coder」をダウンロードしていただきます。

主な受講対象者

アンケートの自由記述やテキストデータを活用した分析に関心がある教職員。基礎的な内容となりますため、主に初級者の方を対象とします。

到達目標

1. テキストデータの特徴や取り扱う際の注意点を理解し、説明することができる。
2. テキストマイニングソフト「KH Coder」の基本操作を行うことができる。
3. テキストマイニングソフト「KH Coder」を利用して作成した図から解釈を行うことができる。
4. 学んだ方法をもとに、自身の業務での活用案を提案することができる。

日時

8月25日(木) | 12時30分～14時30分

中堅職員のための後輩指導 —理論と実践方法—

竹中 喜一（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 准教授）

講師略歴

専門は高等教育論および教育工学。特に大学教職員の学習と研修転移に関心を寄せている。前職では関西大学事務職員としてFD/SD/教学IRなどの業務と部下数名の育成と評価担当者としての役割を担う。業務と並行して名古屋大学大学院教育発達科学研究科、大阪大学大学院人間科学研究科を修了。博士（人間科学）。主な著書に『大学SD講座4大学職員の能力開発』（共編著）、『看護教育実践シリーズI 教育と学習の原理』（分担執筆）などがある。

プログラム概要

大学職員の業務には指導を行う機会が多くあります。メンターなど指導者の役割を明確に与えられる場合もあれば、そうでない場合もあります。指導のしかたは、指導者自身が受けた指導など経験に影響を受けます。しかし、自分にとってよかったと思う指導が指導対象者にとってもよいとは限りません。指導対象者の経験や能力、仕事やプライベートに対する考え方などによって、適切な指導は異なってくるのです。

適切な指導を行うには、指導者あるいは指導対象者の状況によって応用可能な、指導に関する原理を知っておくことが重要です。このプログラムでは、指導対象者の目標設定やフィードバック、説明や問いかけといった指導に活用可能な原理とそれに基づく実践方法を学んでいきます。実践方法にはさまざまな選択肢があることに、参加者のみなさまがもつ実践知の共有も交えながら気づく機会にしたいと考えています。

準備物・事前課題

後輩指導でご自身が工夫しているコツについて、当日お伺いします。特定の場面を想定したもので、日常的に心がけているものでもかまいませんので、箇条書きで2~3つ程度記述できるよう準備をお願いいたします。

また、『大学SD講座4大学職員の能力開発』（竹中喜一・中井俊樹編著、玉川大学出版部）をご覧くださいと内容をより理解することができます。

主な受講対象者

新卒から5~10年程度の経験をお持ちの職員、主任・係長級の職員で、後輩指導の経験がある方を主な対象と想定しています。部署全体のマネジメントというよりは、1対1の指導を想定した内容となっています。

到達目標

1. 指導者の役割を説明できる。
2. 指導対象者の学習目標を設定できる。
3. 説明や発問を組み合わせた指導ができる。

日時

8月25日(木) 12時30分~14時30分

Power Query for Excelを用いた 効率的なデータ処理

高畑 貴志(高知大学 大学教育創造センター 准教授)

講師略歴

専門は情報科学。2000年に大阪大学基礎工学研究科助手、2003年に高知学園短期大学講師、2015年に湊川短期大学准教授、2018年より高知大学大学教育創造センター特任講師、2021年より現職。eラーニング(知プラe)や教学IRなどを担当。

所属学会:日本教育工学会、日本オペレーションズ・リサーチ学会、日本医療情報学会

プログラム概要

Power Queryは、比較的新しいExcelの機能です。このプログラムでは、講師がダミーのデータを用いた処理手順を順に説明していきます。受講生は、手元で同じ処理を再現することで、Power Queryの基本的な概念と操作方法を学びます。

Power Queryを使うと、以下のようなデータ処理を効率的に行うことができます。

- ・複数のデータソースからのテーブル(表)をExcel上で容易に結合できる。
- ・データ処理の試行錯誤が、操作ステップの削除、追加、適用順序の入れ替えとして行える。(途中の状態の表を作成しておく必要がない。)
- ・一連の操作を、更新されたデータや異なるデータセットに対して容易に適用できる。
- ・ワイド形式(学生毎に1行のアンケートデータ:Google Formの出力等)とロング形式(回答ごとに、回答者、質問番号、回答内容を1行で格納:BIツールに適する)を相互に変換できる。

準備物・事前課題

受講には、Windowsのデスクトップ版のExcel 2016、Excel 2019、Excel 2021、Office365版 Excelのいずれかをご用意ください。(MacではPower Queryのほとんどの機能を利用できません。)

プログラム受講前に事前に公開される説明資料とダミーデータを用いて、オンデマンドで学習することができます。

主な受講対象者

日常の業務でデータ処理を多く行う教職員、特に、以下のような経験をされている方に適した内容です。

- ・同じようなデータ処理を何度も繰り返すことがある
- ・データの集計のために試行錯誤を繰り返す
- ・Power BIを使用することがある(Power QueryはPower BIにも組み込まれているため)

到達目標

1. Power Queryを用いて、複数のExcel表のデータを結合して、特定の条件に適合する対象のみを抽出して集計した結果をExcelの表として取得するという一連の集計手順を実行できる。
2. 抽出条件を変更して同じ集計を適用できる。
3. 元データを入れ替えて同じ集計を適用できる。
4. ワイド形式とロング形式のデータを相互に変換できる。
5. Power Queryを自分の大学の業務で活用できる場面を挙げるができる。

日時

8月25日(木) 12時30分~14時30分

個別最適化された教育・人材育成の実現

講師

秦 敬治(岡山理科大学 副学長・教育学部長)

1986年西南学院大学職員、2006年愛媛大学助教授～教授、2014年追手門学院大学副学長、2018年岡山理科大学副学長。専門は教育経営学(博士 教育学)。特に、高等教育経営で大学運営の在り方、教学マネジメント、教職員の能力開発、リーダーシップ論、コーチング等の研究・教育と実践を行っている。多くの大学でのFD・SDに加え、学生のリーダーシッププログラム開発・実施も行っている。また、大学や企業のコンサルティングを行うとともに、経営者・行政の管理職・市民向けのリーダー養成研修も多数、引き受けている。さらに、一般社団法人大学改新機構を設立し、全国の大学関係者とともに学生の成長にポジティブに関与するための教職員の能力開発と大学組織運営について、研究と実践を重ねている。

小松川 浩(公立千歳科学技術大学 理工学部 情報システム工学科 教授)

専門は情報工学、学習科学。大学eラーニング協議会会長。教育システム情報学会副会長。公立千歳科学技術大学 大学情報センター長、学長補佐(数理データサイエンス教育推進担当)。長年、eラーニング等のICT活用教育を通じた教育改革に従事して、他大学の外部評価委員も歴任。北海道Society5.0推進会議委員(人材育成リーダー)。

高橋 浩太郎(文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室 課長補佐)

2002年文部科学省入省。文化庁、生涯学習政策局(現・総合教育政策局)等を経て、2008年に高等教育局に着任、以降は一貫して高等教育行政を担当。高等教育企画課高等教育政策室、大学振興課、専門教育課、九州大学学務企画課長等を経て2021年より現職。

高等教育局では、中央教育審議会における政策立案や教務系業務に長く携わる。

コメンテーター

中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 教授)

進行

仲道 雅輝(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 副室長 准教授)

プログラム概要

新型コロナウイルス感染症拡大抑止のための世界的な人的交流の制限は、社会経済活動を停滞させ、大学教育にもさまざまな影響を及ぼしてきました。大学教育では、対面授業中止による学習機会の喪失を防ぎ教育の質を保障するため、ICT を活用したオンライン授業を推進するとともに、SDGs、カーボンニュートラル、DX、ダイバーシティ等新たな考え方や技術を取り入れ、これらの課題に取り組んできました。今後も、新たな感染症の拡大、大規模災害等の危機の発生や人々が求める価値の変化により、大学が果たすべき役割も変化していくといえます。

本シンポジウムでは、秦敬治氏、小松川浩氏、高橋浩太郎氏をお招きし、このような変革が進む社会をけん引し、グローバルな視点を持ち、地域を支える優秀な人材を育成するために、大学教育や大学教職員が担う役割とはどのようなものか、また、変革を支える教職員の能力開発について、多様な視点から意見を交わし、アフターコロナを見据えた革新時代における大学教育の姿、個別最適化による教育・人材育成のあり方について、参加者の方々とともに理解を深める機会としたいと思います。

主な受講対象者

教職員(SPODフォーラム2022に参加される全ての方)

日時

8月25日(木) 15時15分～17時15分



教学マネジメント入門

一学修者本位で捉えなおす教育活動一

山咲 博昭(広島市立大学 学長付 講師/大学評価オフィス 副オフィス長/
教学企画オフィス オフィス長補佐)

荒木 俊博(淑徳大学 大学改革室 室長代理)

岩野 摩耶(山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室 講師)

白藤 康成(京都産業大学 学長室IR推進室)

堀 佑二(獨協大学 自己点検・評価室事務課)

講師略歴

【山咲博昭】学校法人関西大学の事務職員を経て、2019年より現職。関西大学では総務局付(大学基準協会出向)、総合企画室企画管理課で主に自己点検・評価業務等に従事。現職では、主に内部質保証、大学評価、教学企画やIR、SD等を担当。専門は大学評価や内部質保証、SD。愛媛大学教職員能力開発拠点スタッフ・ディベロップメント・コーディネーター。

【荒木俊博】民間企業を経て、2009年度より淑徳大学大学改革室にて内部質保証、大学評価、教育改革やFD/SDを担当。専門は大学評価や内部質保証。

【岩野摩耶】民間企業、明星大学の事務職員を経て、2021年度より現職。明星大学では学長室企画課、統合IRセンター等で主にIR業務等に従事。現職では、主にFD・SD、教学IRを担当。

【白藤康成】心理職公務員、他大学事務職員を経て2020年度より現職。IRや教学マネジメントを担当。SDや組織マネジメントの研究も行っている。

【堀佑二】2012年度に獨協大学入職。2015年度より自己点検・評価室に配属(現職)。認証評価、FDを担当。

プログラム概要

令和のこの時代、個々の大学は教学マネジメントの体制を構築することが求められています。教学マネジメントは様々な領域に関わるものであり、どの部署の職員であっても教学マネジメントに関わります。

あなたは所属組織の教学マネジメントの体制や取り組みについて説明できますか？

所属組織の教学マネジメントにどのような課題があるか把握していますか？

学修者本位というキーワードは近年よく聞きますが、何を意味しているか説明できますか？

本プログラムでは、教学マネジメントとは何か、教学マネジメントの5つの柱について理解するインプットやワークを行います。またプログラムの中の講演やワークを通じて、学修者本位とは何かを理解します。そのうえで、学修者の立場から教学マネジメントを捉えなおすことで、所属大学の課題を把握するとともに、大学の構成員の一員として、自らの置かれた立場からできることを考えます。

準備物・事前課題

事前課題：

- 1) 令和2年1月22日 中央教育審議会大学分科会の「教学マネジメント指針」を読んてくる。
- 2) 申し込み後にお送りするチェックリストで所属組織の状況を確認する。

事前準備：

- 1) 事前課題のチェックリストを手元に準備する。(データ、紙どちらでも可)
- 2) チェックリストで使用した資料があれば、当日手元にあるように準備する。

主な受講対象者

- ・係長、課長補佐相当の中堅層の職員
- ・教学マネジメントに関連した実務を担う方

到達目標

1. 教学マネジメントの5つの柱を説明することができる。
2. 学修者本位とは何かを説明することができる。
3. 所属組織における教学マネジメントの課題を抽出することができる。
4. 教学マネジメント上の課題の解決案を提案することができる。

日時

8月26日(金)9時30分～14時30分

事例で考える

教職課程における多様な履修相談対応

小野 勝士(龍谷大学 社会学部教務課)

講師略歴

関西学院大学大学院法学研究科民刑事法学専攻博士課程前期課程修了。修士(法学)。平成13年度から龍谷大学に勤務し、教学部、経理課、文学部教務課、世界仏教文化研究センター事務部を経験し、令和2年から現職。大学教務実践研究会代表。関連する著書に『教職課程事務入門』シリーズの【1】～【4】(いずれもジダイ社)がある。

プログラム概要

ある日電話で「平成11年に卒業して、これから教員免許状を取得したいのですが、どのようにすればよいでしょうか?」とかかかってきたときどのように対応しますか?

このような卒業生等からの相談について、どの入学年度のカリキュラムを適用するのか等個別対応になる場合がほとんどだと思われます。

本プログラムでは、学生配付の学修の手引きでは対応できない事案について拠り所となる法令を紹介し、学んだ知識の業務への活用方法について、ワーク(個人)を通じて体験することで教職課程の窓口対応力の向上を目指します。

(令和3年度も同テーマで実施しましたが、昨年度から今年度にかけての法令改正に合わせた内容にしております。)

※中高一種免許を事例に取り扱います。

1. 自己紹介(講師、参加者<チャットで>)
2. 事例(時折、個人でワークを行います)
3. 参考書籍・セミナーの紹介

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

中学または高等学校教諭免許状設置課程のある大学・短大において教職課程の履修相談を担当している教職員

到達目標

1. 法令を理解したうえで正確に不足単位の説明をすることができる。
2. 履修相談にあたって必要な情報が掲載されているウェブサイト等を提示することができる。
3. 想像力を働かせて履修相談に対応する姿勢を身につけることができる。

日時

8月26日(金)9時30分～11時30分

パフォーマンス評価のための 課題の作り方

飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター 助教)

講師略歴

令和2年3月、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程(高等教育開発論講座)研究指導認定退学。京都大学高等教育研究開発推進センター研究員を経て、令和2年9月より現職。主な研究テーマは情報リテラシー教育・学習評価。

プログラム概要

パフォーマンス評価とは、○×式や多肢選択式、空欄記入式のテストではなく、レポート・論文を含む文章での記述や、実技、成果物の作成等を通じて学生の学習成果を評価する方法です。パフォーマンス評価により、単なる学習内容の記憶だけでなく深い理解や、現実に近い場面で学習内容を発揮でき、さらには知識だけではなく判断力や表現力等も評価することが可能です。しかし、その方法は分野や内容、さらにその授業や大学全体が目指す目標に応じて様々な形があり得ます。

このプログラムでは、まずパフォーマンス評価とは何か、どのように自分の授業でパフォーマンス評価を作成したり、既存の課題をパフォーマンス評価に置き換えるかについて、講義とグループワークを用いて理解を深めることを目的としています。そのため、受講にあたってはぜひご自身が現在授業で行っている課題をご持参ください。

皆さまのご参加をお待ちしております。

準備物・事前課題

自身の授業で行っている課題(グループワークで使用)

主な受講対象者

- ・パフォーマンス評価に関心がある教員
- ・自身が行っている評価をパフォーマンス評価に置き換えたい教員
- ・自身が行っているパフォーマンス評価をブラッシュアップしたい教員

到達目標

1. パフォーマンス評価とは何かを説明することができる。
2. 自身の授業にどのようなパフォーマンス評価がふさわしいかを判断できる。
3. テスト形式の課題をパフォーマンス評価に置き換えることができる。

日時

8月26日(金)9時30分~11時30分

大学教職員のためのZOOM百物語

石井 知彦(香川大学 創造工学部先端材料科学領域 教授)

講師略歴

平成3年東京工業大学理学部化学科卒業、平成5年同修士、平成8年同博士修了。これまでいわき明星大学、東京都立大学で勤務。平成14年度から現職。現在は香川大学教育戦略室、学長特別補佐、創造工学部副学部長、先端材料科学領域長を併任。

ホームページ<https://www.eng.kagawa-u.ac.jp/~tishii/>

プログラム概要

二年前にオンライン授業・会議が急に始まりました。当初は戸惑っていた教職員の皆さんも、今ではすっかりZoomに慣れた頃だと思います。この講座では、この二年間に皆さんが経験したであろうZoomの四方山話を紹介するとともに、Zoomの奥深さを一緒に考えていきたいと思います。Zoom初心者の方は大歓迎です。Zoomの達人の方にも、目からウロコの楽しいテクニックをたくさん持って帰っていただきます。

【内容】

○49人以上のギャラリービューを表示したい。○授業中に来客が来たら？○聞こえていますかー？分かりますかー？○この先生、手書きで下ばかり向いて何やっているんだろう？○パソコンが落ちた。どうする？○カメラはオフでもいいの？○先生に顔を見られてもいいけど他の学生に見られたくないな。○画面共有の切り替えが面倒。○iPadに手書き、画面が狭すぎる。○パワポを画面共有すると自分の顔が映らない。

【さらに】

○留守宅のワンちゃんを見守ります。○小学生はZoomで鬼ごっこ。

準備物・事前課題

会議ではお互いに顔を合わせることの重要性を説明する内容となっております。そのため、講義中に適宜カメラをオンにして参加していただくようお願いさせていただきます。カメラをご準備の上、背景が写り込んでしまわないように、適宜バーチャル背景などをご利用ください。

主な受講対象者

- ・Zoomを一度も使ったことがない教職員
- ・Zoomをある程度使ったことがある教職員
- ・Zoomを使って何か困ったことを経験したことがある教職員
- ・Zoomの達人
- ・Zoomマニア

到達目標

1. Zoomでこれまでに経験した困りごとを解決することができる。
2. Zoomのより便利な使い方を理解し、今後授業や会議で実践することができる。
3. Zoomをより便利に使うための周辺機器について説明することができる。

日時

8月26日(金)9時30分～11時30分



はじめての係マネジメント講座 ～係長1年目のTips～

吉岡 瞳(高知大学 学務部学務課 課長補佐)

講師略歴

平成18年10月高知大学に入職、これまで主に学務系(総務・教務)や国際系の事務に携わる。SPOD次世代リーダー養成ゼミナール5期生。仕事、家事、子育てをしながら、学生として大学院(修士論文テーマ「大学職員のキャリアにおける成長の支援方法について～企画力と学習共同体に着目して～」)へ通った経験をもつ。係長業務は、平成28年から現在の学務課総務係長兼務まで7年間の経験あり。SPODにおける講師経験:SPODフォーラム、大学人・社会人としての基礎力養成プログラム研修(レベルI)、職員のための講師養成講座。

プログラム概要

近年、みなさんの周りでもたくさんのベテラン職員が退職され「入職したばかりだと思っていたら、いつのまにか中堅職員になっている」もしくは「若手職員だと思っていたら、いつの間にやらどんどん職位が上がってきている」と感じておられる方も少なくないのではないのでしょうか。経験値が少ない中で昇任し、係マネジメントを任せられ、なにをどうしたらいいのかと試行錯誤をされている方も多いことでしょう。

今回、そんな係長1年目の皆様や係長になることに不安を感じている主任の方を対象に「はじめての係マネジメント講座」と題し、係長1年目に知っておくとよいマネジメントのコツをTipsとしてお届けします。また、グループワークを通して、日頃皆さんが工夫されているマネジメントの事例についても情報交換を行い、同様の問題意識をもつ大学職員同士のネットワーキングの機会となることを願っています。ぜひ、積極的なご参加をお待ちしております。

準備物・事前課題

グループワーク等を通して、同様の問題意識を持つ仲間との情報交換の時間を設定します。日頃皆さんが実践している「①係メンバーとのコミュニケーションのコツ、②ご自身が実践している自己啓発、③系のメンバーのほめ方、叱り方」について、講義冒頭でアンケートに記入いただきますので、簡単に纏めておいてください。

主な受講対象者

- ・今年度又は昨年度に初めて係長になった方で係マネジメントを1から学んでみたい方
- ・係長になることに不安を感じている主任級の方

到達目標

1. 係長による係マネジメントの役割を説明できる。
2. 系のメンバーをよく観察し、係長としてメンバーに応じた対応ができる。
3. Tipsや同じ立場の参加者の工夫を知ることを通して、自分にあった係マネジメント法を見出せる。

日時

8月26日(金)9時30分～11時30分

コロナ禍における障害学生への 合理的配慮と修学支援

佐々木 銀河(筑波大学 人間系 准教授)

講師略歴

博士(障害科学)。筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリア(DAC)センター助教、准教授を経て、2019年10月より現職。専門は障害学生支援で、筑波大学DACセンター発達障害学生支援(RADD)プロジェクトの専門アドバイザーとして、発達障害学生支援モデルの構築と展開を進めている。また、教育関係共同利用拠点「ダイバーシティ&インクルージョン教育拠点」の運営委員およびスタッフとして、全国の大学等への障害学生支援に関する普及啓発にも取り組んでいる。主な著書(いずれも共著)に、『よくわかる!大学における障害学生支援』(ジヤース教育新社、2018)『合理的配慮ハンドブック:障害のある学生を支援する教職員のために』(日本学生支援機構、2018)。2022年4月科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞(理解増進部門)を受賞。

プログラム概要

コロナ禍となり、オンライン授業が各大学等で行われるようになりました。大学や授業ごとに様々な形態で行われるオンライン授業において障害学生のより良い学びはどのような方法でもたらされるのでしょうか。

このプログラムでは、講師が行ったオンライン授業における障害学生の修学状況調査の結果を踏まえて、障害学生におけるオンライン授業のメリット・デメリットを解説します。また、授業のユニバーサルデザイン化に向けた具体的な対応例を紹介し、合わせて、改正障害者差別解消法により私立大学においても法的義務となる合理的配慮について検討プロセスや主要な考え方を紹介します。参加者が自校で活用できるように講義の中では支援技術など具体的な対応例を可能な限り多くご紹介します。

グループワークでは障害学生からの申し出事例を講師から提供し、合理的配慮の検討を参加者同士で行います。自校における現状や対応状況なども共有する機会になればと考えております。

なお、このプログラムでは身体障害から発達・精神障害までを取り扱います。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・授業担当教員
- ・障害学生支援に関係する教職員
- ・関心のある教職員

到達目標

1. 障害者差別解消法により大学教職員に求められることを説明することができる。
2. オンライン授業を障害学生が受ける場合の課題や対応例を1つ以上、説明することができる。
3. 合理的配慮の検討が必要な障害学生に対して、対応方法を1つ以上、提案することができる。
4. 障害学生への組織的な対応について、自校の課題を説明することができる。

日時

8月26日(金)12時30分~14時30分

若手職員向け超入門！ 研究者と学術情報流通

井上 昌彦(関西学院大学図書館 運営課 課長)

講師略歴

図書館情報大学卒業、大阪市立大学大学院 創造都市研究科 前期課程修了(都市情報学)。就任以来、大学図書館・短期大学図書館・研究推進社会連携機構に配属される。これまでの担当業務から、学術情報流通の変容と今後のあり方、それを通じての研究者支援について、強い関心を持つ。

プログラム概要

「科研費」、「査読」、「インパクトファクター」、「電子ジャーナル」、「研究評価」、「オープンアクセス/オープンサイエンス」…。若手職員の皆さんも、これらのいくつかは耳にしたことがあるでしょう。では、これらについて、皆さんはどれくらいご存じでしょうか？

皆さんがこれから研究者を支援していくためにはまず、研究者を取り巻く世界について知ることが大切です。

研究者を取り巻く世界は、ドラスティックに変化しています。研究環境とともに、研究者の知的生産物である学術情報(論文等)も、そのあり方を劇的に変えています。

このプログラムでは以下の3つのポイントを通じ、研究者を取り巻く世界と今後の支援のあり方について考えます。

<3つのポイント>

- ・研究環境の変化
- ・学術情報流通の変化
- ・大学(とりわけ図書館)の果たすべき役割

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

大学職員。特に本プログラム内容について、業務上接する機会の少ない一般職・若手を歓迎します(大学図書館員も歓迎)。

大学職員向けに基礎からゆっくりと話しますので、教員や研究支援に携わる職員など、本テーマに関する基礎的な知見を有する方や当事者は、受講する必要がありません。

到達目標

1. 研究環境と学術情報流通の変化を通して、研究者を取り巻く世界を理解すること。
2. 大学(図書館)の果たすべき役割や方向性を、イメージできること。
3. 自分なりの問題意識や関心を持ち、長期的に研究者に寄り添う意識を強化すること。

日時

8月26日(金) 12時30分～14時30分

大人数のオンデマンドe-Learning授業 を運用するためには

NEW!

林 敏浩(香川大学 副理事、情報戦略室 副室長、創造工学部 教授、
大学連携e-Learning教育支援センター四国 センター長、
大学教育基盤センター 副センター長、情報メディアセンター 情報監)

講師略歴

平成元年3月徳島大学工学部情報工学科卒業、平成6年徳島大学にて博士(工学)の学位取得。平成6年より佐賀大学理工学部講師、平成17年より香川大学総合情報基盤センター准教授、平成25年より香川大学 総合情報センター(現在、情報メディアセンター)教授。教育工学を専門として、大学全体の教育支援システムを含むコンピュータ・ネットワークシステムの導入、運用、管理、利活用支援まで広範に担当。

プログラム概要

コロナ禍に対する授業実施手法としてe-Learningが多くの教育機関で採用されました。このような授業実施の経験を踏まえ、対面授業との併用を前提としてe-Learningの利活用が今後も進むと考えられます。e-Learningを単に対面授業の置換として考えるのではなく、対面授業にないe-Learningの特徴を活かすことが肝要と言われています。例えば、時間割や場所に拘束されないことで、学生の学びの機会を増やせます。しかし、このような制約が外れると大人数の履修者対応などの検討が必要になります。本授業では大人数のオンデマンドe-Learning授業(1クラス500~1000名を1名の教員で対応)を対象として、授業理念、設計、運用、実施に有用なノウハウなどについて実経験に基づき情報共有したいと思います。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

大人数の履修者を対象とするオンライン授業の設計や実施に関わる教職員

到達目標

1. e-Learningの利点、欠点を説明できる。
2. 大人数のオンデマンド型e-Learning授業の授業理念、設計、運用の留意すべき点を説明できる。
3. 大人数のオンデマンド型e-Learning授業に必要な機器やシステムを提案できる。

日時

8月26日(金)12時30分~14時30分

やってみよう!ピア・サポート ～理論と実践の両面から～

佐々木 菜々(広島修道大学 入学センター 入学課 主事)

講師略歴

平成26年に広島修道大学入職。図書館配属となり、図書館ピア・サポーターの育成・指導やピア・サポートプログラムの運営、利用者教育、図書館の広報などを経験。平成29年に入学センターに異動。高校生向けのガイダンスや広告の作成、サイト分析などを担当。毎年約100名の学生スタッフとともにオープンキャンパスをはじめとした学生募集イベントの企画・運営に取り組む。日本ピア・サポート学会所属。

プログラム概要

平成12年に「廣中レポート」で学生中心の大学への転換や正課外活動の重要性が提示されて以降、多くの大学で学生支援のための取り組みが展開されてきました。

本プログラムでは、その中でも、指導者のもと仲間同士で援助し学びあう教育的な実践活動である「ピア・サポート」を題材とします。大学において、職員と学生が協働し、より教育効果の高い活動を実施するための考え方や手法について、理論と実践に基づいてお話しします。

まず前半の理論編では、ピア・サポートの定義やピア・サポートプログラムの構造などについて説明します。続いて後半の実践編では、参加者の皆さんに学生対象の研修で行っているコミュニケーションのワークを体験していただく予定です。

「学内でピア・サポート活動をやってみたいけど、何から始めれば良いか分からない」「初めて学生支援業務の担当になり、学生との関わり方に悩んでいる」「大学の教職員として、学生支援に関する知識・スキルを身につけたい」そんな皆さんのご参加をお待ちしております。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・学生支援業務やピア・サポートの担当者
- ・学生支援業務やピア・サポートに興味のある方

到達目標

- 1.ピア・サポートの理論を理解し、説明できる。
- 2.プログラムで学んだピア・サポートの知識・スキルを業務や日常生活で活かすことができる。
- 3.所属大学におけるピア・サポート活動の企画ができる。

日時

8月26日(金)12時30分～14時30分

事例から考える教学IRデータの活用



真鍋 亮(松山大学 入学広報部入学広報課 係長)

講師略歴

平成15年4月から松山大学に事務職員として勤務し、学務課、図書館情報サービス課、キャリアセンター課、薬学部事務室、学生課を経て、令和3年度から現職。広島大学教育学研究科博士課程後期修了。博士(教育学)。専門は高等教育学、教育経済学。令和元年4月から3年間、学内での教学IRプロジェクトを実施。

プログラム概要

大学教育改革に関する近年の政策的動向を見ると、教学IR体制を確立させる事と共に、学修成果の可視化の推進が強調される傾向にあります。

これらの政策は、学修成果を媒介とした「高校と大学」「大学と社会」の接続を前提としており、大学教育を一体的な教育制度として俯瞰する視点が、ますます重要になってきていると考えます。それに伴い学修成果の把握を行う大学は年々増加しており、学修成果の可視化の手段として、外部の標準化されたテスト等の利活用が拡大しています。

そこで、本プログラムでは、教学IRデータ活用の事例を交えながら「高校と大学」「大学と社会」の接続から得られる大学教育の俯瞰的視座、及び学修成果の可視化における課題について、講義とグループワークを通じて参加者のみなさまと共に考える機会となる事を目指します。

みなさまのご参加をお待ちしています。

準備物・事前課題

「高校」「大学」「社会」それぞれの場面での成果指標はどのようなものがあるか、考えてきてください(例えば、高校評定平均値、大学 GPA、ジェネリックスキル、就職先、所得など)。

主な受講対象者

教学IRに関心のある教職員

到達目標

1. 教学IRデータの活用事例を知る事ができる。
2. 「高校」「大学」「社会」の接続関係を理解することができる。
3. 学修成果の可視化における課題について説明できる。

日時

8月26日(金) 15時15分～17時15分

業務をつなぐ・広げる・デザインする (若手職員対象)



橋本 規孝(学校法人立命館 総務部秘書課 課員)

講師略歴

2006年4月に学校法人立命館に入職後、立命館大学国際関係学部事務室、立命館アジア太平洋大学アドミッションズ・オフィス(国際)、大阪いばらきキャンパス開設準備課、グローバル教養学部設置準備事務室などを経て、2020年11月から現職。

異なる部門を渡り歩いてきた経歴の影響で、業務経験の活かし方について悩みと関心を持ち、試行錯誤を続ける日々。修士(教育学)。京都芸術大学大学院学際デザイン研究領域(通信制)にMIとして在籍。

プログラム概要

仕事をしていて、「こうなったら良いのに!」というアイデアを思いついたり、「なぜこうならないの?」と疑問を抱いたりすることはありますか?

大学のあり方が変容するなか、このようなアイデアや気づきは一層大切になります。実現するのは簡単ではありませんが、ほかの業務とのつながりや関連する部局などの広がり意識して取り組むことで、実現や解決に向けた一歩を踏み出すことができます。

このプログラムでは、個人のアイデアをベースに、グループ内でアイデアを持ち寄り、「新しい学部の構想」をグループ単位で提案します。複数回のワークを通してメンバー同士で協力や調整をしながら、自分のアイデアを掘り下げ、ほかの部局などとの関わりについて考えます。自分のアイデアをほかのアイデアや業務とつないで広げ、グループとしてつくりたい学部を構想します。

準備物・事前課題

「こんな学部をつくりたい」「こんな仕組みや制度を設けたい」「こんな施設やサポートがあったらいいな」といったアイデアをいくつか箇条書きにして手元にご用意ください。参加者が持ち寄るアイデアが、新しい学部のタネになります。

主な受講対象者

- ・30歳程度までの事務職員
 - ・見つけた課題やアイデアを実現してみたい事務職員
 - ・アイデアのつなげ方や広げ方を学びたい事務職員
- ※学部等を新設した経験や教務部門での経験は不問です。

到達目標

1. 自分のアイデアを実現するためのプロセスをイメージできる。
 2. ほかのひとや部局の業務と自分のアイデアを関連づけて考えられる。
 3. 他者と協力・調整しながら、アイデアを具体化できる。
- ※学部等の設置認可申請の実務に関するプログラムではありません。

日時

8月26日(金)15時15分~17時15分



学生の自律性を引き出す授業設計

仲道 雅輝(愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 副室長 准教授)

講師略歴

1995年日本福祉大学社会福祉学部卒、2009年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了 修士(教授システム学)。2017年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士後期課程修了 博士(学術)。1995年より日本福祉大学職員。2011年から愛媛大学にてFD・SDや学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。(2008年度eLC認定e-Learning Professional、2014年度SDC認定)

主な著書には、ナカニシヤ出版の「大学におけるeラーニング活用実践集—大学における学習支援への挑戦2」(共著)、「大学初年次における日本語教育の実践—大学における学習支援への挑戦3」(編著)、さくら社出版の「教育評価との付き合い方—これからの教師のために」(共著)など。

プログラム概要

新型コロナウイルス感染拡大やデジタルテクノロジーの革新、ダイバーシティーをはじめとする急激な社会状況の変化に臨機応変に対応し、貢献できる人材となるには、自ら考え、自身を学習に導く自律的な学習者となることが求められます。

このプログラムでは、インストラクショナルデザインの考え方を基盤として、学生の自律性を引き出す授業設計に活用できるいくつかの原理・理論を紹介しながら、ご自身の授業において、学生の自律性を引き出す方略について考えていきます。

参加者の皆さまには、学生の自律性を引き出すために行っている工夫やうまく自律性が引き出せていないと感じる授業の悩みを持ち寄っていただきます。グループワークへの積極的な参加を通じて、現実的な授業方略のヒントにつながるディスカッションとなることを期待しています。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

学生の自律性を引き出す授業がしたいと考えている教員

到達目標

1. 自律性を引き出すための理論について、1つ以上説明することができる。
2. 自律性を引き出すために、自身の授業に取り入れられる工夫点が3つ以上発見できる。

日時

8月26日(金)15時15分～17時15分

大学における教育の倫理 — 学生とのかかわりを省察する —

上月 翔太 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 特任助教)

講師略歴

専門は高等教育論、文芸学。日本学術振興会特別研究員、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻助教などを経て2020年より現職。FDを始めとした諸活動の企画や実施に加え、大学のカリキュラム編成、大学における人文学、芸術教育について調査研究も行っている。大学のみならず学習塾や予備校、専門学校などの教育機関、企業で、多様な学習者を対象とした教育経験をもつ。大学SD講座2『大学教育と学生支援』において「多様な学生の支援」の章の執筆を担当。その他の著書には『学習支援Q&A』(分担執筆)、『カリキュラムの編成』(分担執筆)などがある。

プログラム概要

教育の場では倫理について考えるべき場面が多くあります。「すべきこと」と「すべきでないこと」があります。「よい」「わるい」が状況次第で変わることもあります。明文化されていないとしても「してはいけないこと」があります。そして、教育の場におけるさまざまな問題は、倫理をないがしろにしてしまったがゆえに生じていると考えることができるかもしれません。

本プログラムではまず倫理とは何か、なぜ倫理を考える必要があるのかについて基本的な枠組みを紹介します。次いで、大学という組織における倫理について倫理綱領などを素材に捉えていきます。そして、学生と接する場面で倫理的な問題がどのように生じるのかを一緒に考えます。

プログラムを通じて、とりわけ学生との関わり合いにおける倫理的な問題にはどのようなものがあるのかを皆さんと共有したいと思います。倫理という点から自身を振り返り、日常的な場面における倫理的な問題を発見できるようになることを目指します。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

学生と日常的に接することの多い教職員(職歴や経験年数は不問)

到達目標

1. 教職員になぜ倫理が求められるのか説明できる。
2. 組織の文脈から倫理について考える観点をあげることができる。
3. 学生との関係における倫理的な問題を指摘することができる。

日時

8月26日(金) 15時15分～17時15分

地域連携担当者のための合意形成術講座

前田 眞 (愛媛大学 社会連携推進機構 教授 地域連携コーディネーター
SDGs推進室副室長 地域協働センター南予副センター長)

講師略歴

昭和52年3月広島工業大学工学部建築学科卒、平成4年7月 邑都計画研究所設立、平成17年特定非営利活動法人まちづくり支援えひめ設立、それぞれの代表を務め、平成27年1月より愛媛大学社会連携推進機構にて地域連携コーディネーター就任。起業してから24年間にわたって地域活動や市民活動の社会的起業支援を実施してきて、まちづくり松山、お城下松山(松山市)、まちづくり郡中(伊予市)、川津南やちっみる会(西予市)、シクロツーリズムしまなみ(今治市)、河辺の未来を考える会(大洲市)、西条市小松町立志隊等のアドバイザーや西予市まちづくりアドバイザー、松山市コミュニティアドバイザーに就任する等のまちづくり組織の設立、運営支援に参画。

プログラム概要

現在の地域社会は、急速な人口減少、超高齢社会、少子社会、商店街に象徴される商業の衰退、地場産業の衰退など、地方は大きな転換点にさしかかっています。それらを打開するために、「地方創生」が叫ばれています。この地方創生の実現に向けては、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な地域づくりが求められています。これらの実現に向けて、地域における課題解決への対応とそれに資する人材の育成が求められています。

今回の講義では、地域課題の把握、解決に向けてのノウハウ取得と解決に向けた担い手づくりとして、地域住民をエンパワーメントしながら、多様な団体を巻き込んだ協働型事業の構築、合意形成に向けたマルチステークホルダープロセスの手法について、講義とグループワークによる模擬的な演習を通して学びます。

準備物・事前課題

特になし。

主な受講対象者

- ・地域の課題抽出や課題解決に向けて地域住民をエンパワーメントすることに係わった経験の少ない教員の方を歓迎します
- ・地域創生センター等の地域との連携事業に携わっている教職員
- ・地域の課題解決や活性化に向けての活動に興味のある教職員

到達目標

1. 地域の課題やそのとらえ方について説明できる。
2. 地域の課題解決に向けた一つのエンパワーメント手法について理解し、実践できる。

日時

8月26日(金) 15時15分～17時15分